

第4回日本社会関係学会賞の選考結果について

2026年3月
日本社会関係学会

日本社会関係学会では、このたび第4回日本社会関係学会賞として、2024年および2025年に刊行（または学位授与）された出版物と博士學位論文を対象に公募を行ったところ、18点の応募がありました。日本社会関係学会賞選考委員会は、厳正な審査により、以下の通り最優秀賞1点、優秀賞2点、特別賞2点を決定しましたので、お知らせいたします。

【最優秀賞】 1点

西村孝史著『職場のソーシャル・キャピタル—人的資源管理が創り出す個と組織の関係性』中央経済社（2024年3月刊行）

【優秀賞】 2点

片野洋平著『放置資産がコミュニティを毀損する——地域社会に放置された家屋・農地・山林をどう管理するのか』ミネルヴァ書房（2024年8月刊行）

松本典子著『労働者協同組合とは何か—連帯経済とコモンを生み出す協同組合』中央経済社（2025年2月刊行）

【特別賞】 2点

稲葉陽二著『ソーシャル・キャピタル新論』東京大学出版会（2024年9月刊行）

渥美公秀編著／関嘉寛編著／山口洋典編著『集落〈復興〉：中越地震と限界集落の物語』大阪大学出版会（2024年12月刊行）

日本社会関係学会賞選考委員会

委員長：佐藤嘉倫（京都先端科学大学）・委員：尾島俊之（浜松医科大学）・小野晶子（独立行政法人労働政策研究・研修機構）・樽見弘紀（北海学園大学）・露口健司（愛媛大学）・西出優子（東北大学）・松本涉（関西大学）・要藤正任（京都産業大学）

第4回日本社会関係学会賞・講評

日本社会関係学会賞選考委員会

委員長 佐藤 嘉倫

第4回日本社会関係学会賞各賞を受賞された皆様、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

今回の応募作もいずれも優れた作品だったので、長時間にわたって慎重に審議を重ね、さまざまな角度から応募作を検討した結果、最優秀賞1点、優秀賞2点、特別賞2点が選ばれた。

最優秀賞の西村孝史著『職場のソーシャル・キャピタル—人的資源管理が創り出す個と組織の関係性』は、従来あまり注目されてこなかった、人的資源管理がソーシャル・キャピタル形成に及ぼす影響を解明しようとする意欲作である。ソーシャル・キャピタルの概念化はさまざまなものがあるが、本書では職場内における資源の流れに注目して「他者から（自発的な）支援を得る関係性」と概念化し、上述の問題解明に取り組んでいる。個人を対象としたパネル調査、ある事業部を対象とした詳細なインタビュー調査と異動歴データ、上場企業121社を対象とした調査、人事部門を対象とした質問紙調査を詳細に分析して、上述の問題に関する重要な知見を多く得ている。たとえば、常識に反して成果主義の職場がソーシャル・キャピタルにプラスの効果をもっていることが示されている。方法論的に改善する余地があるとの指摘もあったが、問題設定の独創性、そして詳細なデータ分析およびインタビューによる問題の解明は選考委員会において高く評価された。

優秀賞の片野洋平著『放置資産がコミュニティを毀損する—地域社会に放置された家屋・農地・山林をどう管理するのか』は、放置資産——空き家、放置農地、放置山林——という社会問題を学術的な問いとして練り直し、地域コミュニティにおける信頼・協力・共同管理の崩壊を描いた力作である。ソーシャル・キャピタルという用語こそ用いられていないが、ソーシャル・キャピタルが「維持され続けるのか、それとも崩壊していくのか」という問題意識は斬新で鋭いものがある。また問題の指摘や解明だけでなく、政策提言や市民社会への示唆を明確に提示している点も高く評価できる。さらに著者自身が「あとがき」で述べているが、「とにかく誰でも読めるわかりやすい学術書を書きたい」という思いが実現した書籍であることも好感が持てる。

同じく**優秀賞の松本典子著『労働者協同組合とは何か—連帯経済とコモンを生み出す協同組合』**は、行きすぎた資本主義に警鐘を鳴らし、本来の人間らしい「労働」や生活の向上を捉え直す、その側面から労働者協同組合の役割や可能性を示し、経営課題等、今後の発展に必要な要素を明らかにしている。資本主義が高度化し新自由主義の影響が強まる現代社会において労働者の疎外や過度な賃労働化は大きな社会問題となっている。そのような風潮の中で労働者協同組合は労働者が「生きる力」を取り戻す契機になると期待される。本書は、日本の労働者協同組合の歴史と現状、課題および労働者協同組合法を丹念に解説すると

ともに、アメリカの労働者協同組合へのヒアリング調査に基づいて新自由主義社会における労働者協同組合の意義やあり方について重要な示唆をしている。本書は単に労働者協同組合を称賛するのではなく、冷静にその問題点や課題を指摘し今後の発展の可能性を示している。この点は高く評価できる。

特別賞の稲葉陽二著『ソーシャル・キャピタル新論—日本社会の「理不尽」を分析する』は、ソーシャル・キャピタル研究の第一人者である著者が「なぜ賃金は目減りするのに経営者報酬だけ上がるのか」「なぜ孤立・孤独が社会全体に世代を問わず蔓延するのか」等の「現場の違和感」をソーシャル・キャピタル論によって解明した力作である。著者のソーシャル・キャピタルに関する広く深い学識を縦横無尽に活用した分析は圧巻であり、とりわけソーシャル・キャピタルのダークサイドを扱った第4章は読みごたえがある。かつてアルフレッド・マーシャルがケンブリッジ大学教授就任講演で「冷徹な頭脳と温かい心を持って」と述べたが、本書はこの言葉を正に体現している。

同じく**特別賞の渥美公秀・関嘉寛・山口洋典編著『集落〈復興〉—中越地震と限界集落の物語』**は、2004年10月の新潟県中越地震で被災した小千谷市塩谷集落における20年間にわたるアクションリサーチに基づく労作である。限界集落を地域の未来の可能性として捉え、住民の主体性や創造性を描出している。またコミュニティ再生と高齢者の生きがい回復を復興と再定義し、集落維持戦略のあり方として人口増加ではなく「尊厳ある縮退」を理論的・実践的に提言している。ソーシャル・キャピタルという用語への言及は2ページとごくわずかだが、集落住民間のソーシャル・キャピタル、集落住民とアクションリサーチ参加者間のソーシャル・キャピタル、参加者間のソーシャル・キャピタルが重なりあう事例を提示し分析しているといえよう。